図書だより

〈第11号〉
昭和59年9月1日
呉工業高等専門学校
図書委員会

〝ルールを守ろう〟

現在、図書室の図書の帯出（貸出）は、3冊以内、期間は7日以内となっています。皆さんの中には、冊数、期間ともに不満を持っている人があるかもしれません。しかし、広く大勢の人に読んでいただくためには、回転をよくしなければならないのです。そこの所を理解して、帯出のルールを守って下さい。

返却をめんどうがって、お互いの間で又貸ししたり、長期間自分の書棚に放置したままにしたりしないで下さい。図書室の図書は個人のものではなくて、みんなのものなのです。無断帯出の図書が時折ブックポストにもどってくることがあります。無事もどってきたのを喜ばしく思い、一方ではとても情けない複雑な気持を抱くのですが、みんなのものという意識がなくなったら、図書室はなりたちません。ルールを守って、おおいに利用して下さい。

「老人と海」
（ヘミングウエイ）

3M　田　中　　真

この作品を初めに知ったのは「POPEYE」というファッション雑誌の中で、男の生き方について知るならこの本が一番と、紹介されていたのを読んだからである。

日ごろから、男の生き方とかダンディズムというものに興味があり、いつかは読んでみようと思っていた。

読んでみると、たしかに男の生き方というのがせつせつと描写してあった。

内容はというと、一人の老漁夫の物語でこの老人はベテランでありながら85日という長い間、魚が一匹もつれないという不運にみまわれていた。ある日老人が一人で海に出て漁をしていると、老人の舟よりも大きなかじきが釣れ、老人はその魚に引かれて3日間ほど海に流されてしまう。ここで老人は魚と闘い、背中や肩、左手に負傷をおいながらも最後には魚に勝つ。この闘いの最中、老人は何度も魚に話しかける。その会話はまるで戦友に話しかけてるふうでその老人の性格と同様、やさしさに満ちあふれている。老人は左手のひっつりや空腹、網を体でささえているために起る全身のしびれ、太陽の熱、はき気などとも闘いながらも、自分をこんな目に会わせている根本の原因である大魚にやさしく話しかけている。

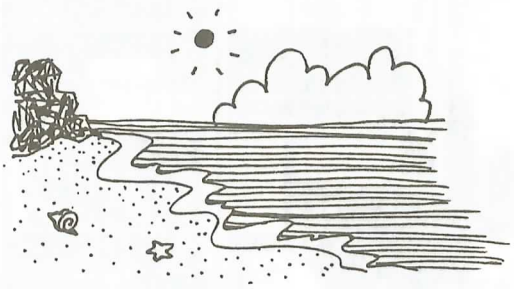
老人は自分の住んでいる港に一人、友達をもっている。まだ少年であるが、老人を尊敬し、愛している。老人はその少年にもとてもやさしく漁にもいっしょに出ることもある。老人は海の上で、苦しんでいる最中何度も、

「あの少年がいたらなあ。」

と言っている。それほど老人にとってこの少年はかかせないものでもあった。

やっとのことで老人は大魚をとり、自分の港へ帰ろうとするが、今度はサメが老人をおそい始める。もちろん老人は舟の上で安全なのだが舟の下へしばりつけた大魚がさめに食われていくのだった。老人は舟の中にあるありったけのもので武器を作り大魚を守った。それはもちろん自分の利益のことに関してでもあるがとにかく大魚を守ってやりたかったのだろう。自分が深追いをしなければ大魚はこうならなくてすんだのだし、自分も全力をつくしたのだ。守ってやらずにはいられない。ぼくはこの老人の気持ちがわかるような気がする。

前に述べたような「男の生き方」についてはわからなかったが、この老人の人生については、何となくわかったような気がする。



「青春の蹉跌」
（石川達三）

3E　平　岡　幸　生

この作品は、日本の現代社会のゆがみをみごとに表現した、創意あふれる快作である。主人公の法律学生である江藤賢一郎は、現実主義的合理主義的な生活態度を基本的に身につけているが、そこから打算的なエゴイストという一面もある。賢明さと同時に臆病な狡猾さを併せ持っている。このような性格である江藤は資本主義社会の中で立身出世し、高い地位を得ようとする。それは、司法試験に合格することで、社会的な地歩を固め、資産家の伯父の三女康子と結婚することで、生活上の足場をかためることによって確立する。江藤はこれらのことを成し遂げるためなら、どんなことでもする人物である。たとえ他人を犠牲にしてまでも……。

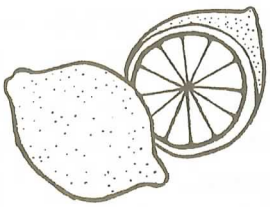
具体例として江藤は、将来の自分の幸せを得るため

ある女性を絞殺している。くわしく言うと、以前、江藤はアルバイトの家庭教師でその女性と知り合い、交際もしていた。そのとき江藤は彼女を恋人としてではなく、ただの異性の友達としていいかげんな気持ちで交際していた。ある日、江藤は資産家の伯父の望むままに、康子と結婚するためには、今いいかげんに交際している女登美子と別れなければならないと考えた。しかし、登美子はそれを受け入れようとしない。なぜなら彼女は、妊娠をしており、また中絶できないくらい子供は育っていた。だが、江藤は、康子と結婚して幸せになるにはどうすればよいかを考えていた。まったく無責任な男である。これからどうするか彼は悩み苦しんだ。その結果、江藤は登美子が死んでくれれば全てうまく行くと思うのである。江藤は登美子を箱根へ誘い出し、湖畔の木立の中で絞殺した。

江藤は、登美子を絞殺したことを後悔した。彼はこう思った。伯父なんか、金が有るだけで、ただの通俗な男、康子だって気位が高いばかりで、女としての能力、女からの価値という点から言うと、案外くだらない女ではないか。おれは登美子と結婚した方が幸福だったかも知れない。あの女は平凡で通俗で、学問も才能も何もないが、おれを愛し尊敬していた。康子よりは何倍もおれを愛しており、そして献身的だった。生涯の妻としては康子よりも登美子の方が、ずっと良かったのではないかと。江藤は現代人にありがちな自分のことしか考えない男、法律以外の分野ではまったく無知である男であった。人間社会で最も大切である道徳を知らない人間性のない男でもあった。

最後に、江藤は警察に逮捕されてしまう。そこで、江藤は死にたいと思った。その絶望の本質は、自分が出世栄達の道を失ったことについての悔恨であり、とりも直さず彼のエゴイズムそのものであった。罪への悔悛ではなくて、やり直しの利かない失敗を嘆いているものであった。

この作品から、人間の最も大切なものを、聞かされたように思われた。



「八甲田山死の彷徨」

（新田次郎）

3E　藤　木　勝　成

八甲田山は青森県のほぼ中央に位置し、冬の間では人はほとんど通ることのできないほどの所である。またその積雪も3メートルは軽くこす豪雪である。この小説で登場している雪中行軍は、この厳寒の八甲田山にしかも最も厳しいといわれている1月下旬に行われたもので、その寒さは、土地の人も「酒も凍る…」というくらいである。

この悪魔のような八甲田山を行軍しようと試みたのは、第4旅団に属する、第5連隊と第31連隊である。

第31連隊は徳島大尉率いる38名の小隊によって行った。隊員は、他の小隊から条件に合った者を一人一人面接を行い決定した精鋭であった。特に積雪の多い地方の者を選んだ。また小隊編成にしたのは、少人数で結束をかため、第一にあまり人数を増やすと厳しい雪中行軍においては指揮が統一できなくなるからである。また装備については、厳しく統一させた。これらはすべて前年に行った岩木山雪中行軍をもとに決定したことであったが、その時は天候にも恵まれ、快晴の中に行い、日程も短いものであった。そこで、今回は、土地土地で案内人を立てて行うことにした。

一方、第5連隊は神田大尉を中心に計画がたてられた。もちろん行軍の指揮も彼に一任されていた。しかし、計画時より山田少佐の干渉をうけ、結局210名の中隊編成で行うことになった。隊員の選出も極めて簡易に行い、他のことすべてにおいても第31連隊に劣り、そして遅れていた。そして神田隊にとっては山田少佐が同行するという、後々に遭難にまで及んだ原因があった。

徳島隊は計画通りにすべてを行い、そして徳島大尉の威権ある指揮と案内人によって八甲田山雪中行軍を成功させた。それも一人の犠牲者も出さずにである。

神田隊の方は徳島隊より3日遅れて出発した。その日の天候は極めて悪かった。それも旭川で零下41度という寒さであった。その中を出発し、八甲田山でも一番きびしいといわれている田茂木野ー田代間の行軍を強行した。しかし前に述べたように準備の不十分な

点から脱落者が続出し、遭難への一途をたどった。そう、山田少佐が神田大尉の指揮権を奪ったため起った、統制の乱れより起ったものだといってもいいだろう。神田大尉は当時としてはめずらしい平民出の将校であった。優秀な将校ではあったが、平民出という劣等感を常に持っていた。それが少佐への反論をさせなかったのであろう。こうしてわずかに生存者１１名を残して他１９９名は八甲田山の白い悪魔に飲み込まれたのであった。

「天は我々を見放した……。」

多くの人は、この文句をよく記憶していると思う。これは、遭難した神田大尉がなすすべがなくなり言った言葉である。この一言が、神田隊のすべてを物語っていると思う。

徳島隊の功績は神田隊の遭難の影にかくれ知っている人も少なかったようである。これは、遭難した兵士の様子を描いた武勇伝などが賛美された、明治時代のかなしさを表わす出来事の一つであろうと思う。

この作品は軍隊という特殊な集団の一種の極限状況における行動を全体的に描き、そしてまた、その中に神田大尉、徳島大尉、山田少佐その他の、個々の人物についても描いて、その対立葛藤をも克明に描いている。そして、民間人の犠牲は、いつの時代もついてまわっているということも描いている。

「ビルマの竪琴」

（竹山道雄）

３Ａ　広　本　典　幸

この小説は、戦争の恐しさと平和の美しさ、尊さを竪琴を弾くのが上手な水島上等兵と彼の戦友たちを中心に描いたものです。

日本が戦争に敗けた後も降伏しようとしない日本部隊があった。水島は、それを説得しに行ったのがきっかけで、多くの兵隊の屍が散らばっているのを見た。その時、彼は、このビルマ中に散らばっている死体を全て埋めるまでは、日本に帰らないことを決意した。それで彼は、自分のことを心配してくれている戦友たちに、自分が帰国しない理由を書いた手紙を送った。この手紙の終わりの方で、水島上等兵はこう書いている。

「我国は、戦争をして敗けて、苦しんでいます。それは無駄な欲を出したからです。思いあがった余り、人間としての最も大切なものを忘れたからです。我等が奉じた文明というものが、一面には甚だ浅薄なものだったからです。この国の人々のように無気力でともすると酔生夢死するという事になっては、それだけではよくないことは明らかです。しかし、我々も気力は有りながら、もっと欲が少なくなるように努めなくてはならないのではないでしょうか。それでなくては、ただ日本人ばかりでなく、人間全体が、この先も到底救われないのではないでしょうか？」

文明というものは、輝かしいものです。しかし、一歩道を踏みはずすと、恐しい戦争を導く結果となるのです。戦争とは、国と国との喧嘩であり、個々の人間の喧嘩ではないのです。しかし、ひとたび戦争になれば個人個人が、お互いに憎しみもなく恨みもない相手を殺さなければならないのです。人間が苦心して築きあげてきた文化も、戦争は破壊してしまいます。たとえその底にどんな立派な理由があっても、戦争というものの現実は、恐しく、醜いものです。しかし、その厳しい戦場にあっても、人間は人間です。戦争が終わってしまえば、そこに個々の性格をもったいつものその人の姿が戻ってきます。そこには敵も味方もありません。お互いの言葉は通じなくても、お互いの気持ちが

分かりあう方法はあります。子供の頃からよく歌っていた民謡のメロディー。しかもそれが、日本人は自国の歌だと思っていたのが、実はイギリスの歌であったという「庭の千草」や「はにゅうの宿」の合唱が、思いもかけず、日本兵とイギリス兵の心を和やかにするという構想は、平和の尊さをよく書き表しています。明日とは言わず、次の一瞬にもどうなるか分からない生命でも大切にしてゆく人間の姿を、美しく描き出しています。

「若きウエルテルの悩み」

（ゲ　ー　テ）

3A　吉　田　知　子

この作品は、ゲーテ自身のヴェッツラにおける、シャルロッテ・ブラとの恋愛体験をもとにして作られたものである。

ウエルテルは舞踏会で、美しくすばらしい女性ロッテと知り合い好意を寄せるが、ロッテにはアルベルトという許婚者がいた。それからウエルテルとアルベルトとロッテの交際が始まり、ウエルテルはしばしばロッテの家を訪ねるようになる。ウエルテルの思いは募る一方で、絶望的な恋に苦悩の日々を送る。またロッテも、教養があり人間としてとても立派なウエルテルを、なにか失いたくない気持ちでいっぱいだった。ウエルテルはアルベルトの事も立派な人だと慕っていたが、ある日、愛する女性を思って人殺しをした作男をウエルテルがかばった事から、アルベルトとウエルテルの仲はこじれ、アルベルトはロッテに対してウエルテルの悪口を言うようになった。そんな中ロッテはウエルテルに友情以上の気持ちを抱くようになり、これ以上気持ちが熱くならないようにと、ウエルテルにあまり会わないようにする。こんなかなうはずのない恋を悲しみ、自殺する事を決めたウエルテルはロッテに会いに行き愛を告げる。そしてロッテにあてて遺書を書き、最後までロッテの事を思いながら、ピストルで頭を射って自殺する。

以上があらすじであるが、私はこの作品を読んでいて何かウエルテルが気の毒でたまらなかった。いや、私だけでなく、こんな風に遂げられぬ恋に悩んだ経験のある人なら、誰でもそう思うだろう。ただ私がちょっと残念に思うのは、なぜウエルテルは死を選んだのだろうかということである。私は、ウエルテルがこの悲しい恋に対してどう耐えていくのか期待しながら読んでいたのに、結局最後は死ぬことで終わってしまったかと思うと、何かこうガックリきてしょうがない。死ぬ事によって何が解決したのかと問われると、これに答えられる人が百人中何人いるだろう。私が中学校の時に読んだ本で、武者小路実篤の「友情」というのがある。この本の内容は、主人公が好意を寄せている女性が、主人公の友人の恋人になるという話で、どことなくこの「若きウエルテルの悩み」に似ているのだが、この主人公は、そういうせつない思いをしながらも、だんだん人間的に大きくなっていく。こういう点がこの両書のちがいであろう。ウエルテルはロッテを好きになることによって、毎日悲しみや苦しみにおわれ、しなくても良い心配までするようになって、ロッテ以外のものはまるで目につかなくなり、悩んで自殺した。私もこんな恋をしたことがある。またこれからもいつそんな思いをするようになるかわからない。だけど私はこんな風に死を選びたくない。自殺する人を卑下するわけではないが、死ぬ事によって気持ちを楽にしようとか、そんなものは逃げとしか思えない。人は何か不幸があると、どうして自分だけこんな目にあうのかとか、自分は世界の不幸ものだとか思いがちだが、私はそんな風にはなりたくない。恋に悩み、友情に悩み、小さな事で悲しみ、そして喜ぶはつらつとした青春を送りたいと思う。

「人間失格」

（太宰　治）

4C　田村秀之

太宰の本の中で、一つだけ異色といわれている、この「人間失格」を読んだ。他の作品は皆、読者を喜こばせるために書いたのに対し、この作品だけは、「治自身のためだけ」に書かれたのであると解説に書いてあった。さて、あまり本を読まない俺が、珍しく本を読んだのは、昔、この本の感想文を読んで感動したからである。

ところで本題にはいるとしよう。人間なんて考え方次第で、これほどまでに卑屈に、くだらなく、堕ち、投げやりになるのであろうか？三度の飯より○○が好きだ。とよく言われるように、飯時間というのは楽しみの一つと考えられているのに、彼にしてみれば、薄暗い部屋で十数人の人々が二列に向かいあって黙々とめしを食べる。この時間は恐怖と不安のものであると考えていた。店で買物をして、おつりをうけとる時に隣人と話をする時に、とにかく人に接する時に恐怖を感じ、「自分からやる！」という気力は、全くない。

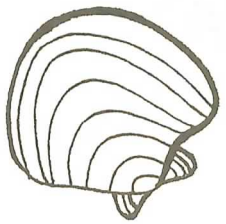
しかし、人とのつきあいは必ず必要だと悟り、人間に対する最後の求愛として彼がした事。―― 道化。なんてつまらない奴だ。とは言え、自分も苦手な相手に対しては、そうしたこともある。よく考えてみると、この「道化」というものは、我々に少なからず必要なものではないだろうか。というのは、確かに「本音」で語り合えない人には、人間らしさを感じることはできない。でも、「本音」だけでぶつかっていっては、会社等では生きていけないと思う。だから、「たてまえ」というのが必要になる。すなわち、「たてまえ」で何かをするのは道化ではないだろうか。

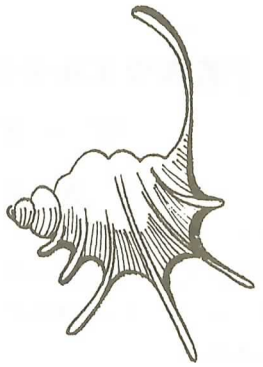
自分が軽蔑していた堀木。しかし、それでいて付き合っていく二人。しかし、堀木も又、自分を軽蔑していた。そしてお互いに自らをくだらなくしてゆく。なんでそんなつきあいをしていくんだ？奴らは何を考えているんだ。とはいえ私達自身、友人づきあいというのを、どれほど大切に考えているのか？太宰自身、4～5回にわたる自殺の失敗。彼がもし仮に、本当にすばらしいという友人に数多く出逢うように試みていたら、彼の人生も大きく変わったことであろう。

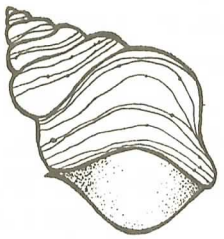
我々は今、生きているのであって、死んでいるのではない。しかし、俺のまわりには、活気がないと思われる人が多少いる。別に、自分は、人間失格と思い込む必要はない。しかし、常に何かはずんでいてほしい。我々は、もっといろいろな人に逢うべきである。そしてお互いに刺激しあおうではないか。治みたいにカラの中に閉じこもっていてはダメだ。自分から何かを求めようとしよう。

この本を読んで、自分も何かしら情けなく感じた。また反動として、人から与えられたものは長続きしない。自分から求めようとして得た物が最高だ！さあ、Do it now！

自由に生きてく方法なんて、百通りだってあるさ！







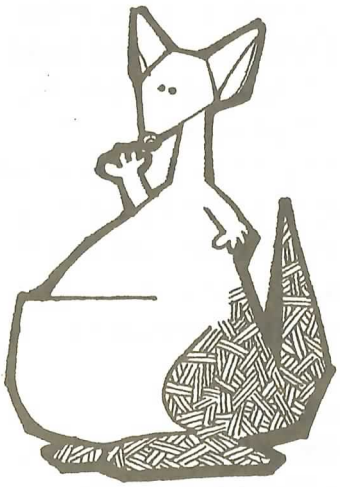
辞書と戯れる

一般科目　宇　根　俊　範

次の文章は「広辞苑」に載せるある単語の説明である。それが何という語の説明か皆さんに考えていただきたい。

「外力に抵抗し得る物体の結合で、一定の相対運動を為し、外部から与えられたエネルギーを有用の仕事に変形するもの」

おそらく半数近くの人は何のことかさっぱりわからないのではないかと思うが、これは「機械」である。以前、歴史の授業で「器械製糸」という語を説明する際に調べてみたのであるが、「広辞苑」には上の文章に続けて「大別すると原動機構・伝導機構・作業機構の三機構から構成され、その中の一機構を欠く場合には『器械』の字を用い（後略）」とある。日頃何気なく使っている言葉も改めて考えてみると、その語の意味内容を充分に理解しないまま使用していることが多い。たとえば「右」はどうであろうか？「左の反対」では説明になってないし、「箸をもつ方」では左利きの人にはあてはまらない。「広辞苑」には「北へ向かって東の方」とある。自分ではその言葉の意味を知っていると思っても、いざ説明するとなると困惑してしまうことがよくある。要するに「知っているつもり」であって、決してこれでは「知っている」ことにはならないのである。ものを創造するうえで疑問をもつことは大変重要なことである。しかし、疑問をもってもそれをそのままにしておくと疑問は疑問のままである。そこからは何も生まれてこないのである。歴史の授業（特に3・4年生）で、いろいろこちらからテーマを決めて図書館等で調べてきてもらうことがあるが、ほとんど辞書・事典のまる写しで先ほどの例からいくならば「調べたつもり」にとどまっている。その辞書に書いてある内容のわからない部分を更に調べてみるといったことをする者は稀である。調べるということは自分が納得し、そして今度は自分がそれを他の人に説明できるようになってはじめて調べたことになるのではなかろうか？その意味においても皆さんには大いに辞書に接してほしい。何もかた苦しく考える必要はない。辞書と戯れるつもりでいい。右が「北へ向かって東の方」とあるならば、「それなら北は？」というように自分でどんどん疑問をつらねていけばよいと思う。そこから何か新しいものが生まれてくるような気がする。これに関して、最近おもしろいことがあったのでこれを紹介して終わりにしたい。「ミイラとりがミイラになる」という諺がある。人を連れもどしに出かけた者がその目的を果せないで自分も先方にとどまってしまうことの意であるが、ある時友人が「なぜミイラをとりに行ったのでしょうね？」という疑問を発した。そういえば確かにおかしい。調べて見る必要があると思った。今までは何となく、ミイラのそばには（エジプトのピラミッドの中にあるミイラを想起すればよい）、金銀財宝が山の如くつまれていて、それを盗みにいった者が結局ピラミッドの迷路に迷って自らもミイラになってしまうのであろうと思っていた。しかし、それならばミイラまでもとる必要はないわけである。いろいろ調べてみて驚いた。中世およびルネサンス時代のヨーロッパではミイラを薬として服用していたのである。ミイラといえば、あの白い布でグルグル巻きにされたものとばかり考えていたのであるが、ミイラは薬だったのである。（ちなみに日本でも江戸時代にはミイラをのんでいるという史料がある）これで、友人の疑問は解けたのである。一つの疑問が私に一つの新事実を教えてくれたわけである。



学び方を教えてくれた本

一般科目　寺　本　康　俊

私が「学び方」を教えられた本の中で、特に印象に残っているのは、増田四郎氏の「大学でいかに学ぶか」（講談社現代新書）である。

その内容を簡単に紹介しますので、共感する所があれば、実際に読んでみて下さい。

1. 学問をするとはどういうことか。

学問、勉強をするということは、単に知識を暗記するということだけではなく、講義に触発されて自分で考える力を養うことである。

その点で、講義は自分が徹底的に研究してみようという機縁を作るものである。また専門だけでなく、幅広い一般教養を身につけることが人間として生きる上でも、学問を追求して行く上でも重要である。

2. 学問への増田氏の歩み

誰でも迷いながら生きて行くのが人間の本来の姿であり、そうしながら一所懸命生きて行くことが大切である。

増田氏は、貧しい農家に生まれ、（旧制）中学校に通うのも鈴鹿山脈から吹きおろす吹雪の中、３０㎝も積もるという二つの峠を雨の日も雪の日も、足の届かない大人用の自転車に横乗りに乗って５年間通ったことが貴重な経験になり、今でも辛いことがあればそれを思い出して心の励みになっているそうである。

また上京して、東京の神田の古本屋街の本の顔を見て歩き、貧乏学生でも買えた岩波文庫をいつもポケットに入れて、暇さえあれば読んで、名著に親しんだという。そして、校正のアルバイトや夜学の教師をして生活費に充てるという苦学をしていた。

3. 苦楽一如

学問にしても、スポーツにしても一所懸命努力して苦しんだから、その後が楽になり充実感があるということ。

無駄骨を折ることが、何をするにしても大切である。

わからないことがあったら、まず調べる事。一、二週間一所懸命調べてどうしてもわからなかったら人に聞く。

調べもしないで人に聞くのは駄目である。そして、次の事に私は非常に感銘を受けました。

増田氏が学生の時代、恩師の書物を運んでいた時、かなりの雨になった。

その時、その恩師は「おい、ぬれないかね」と言われ、増田氏が「大丈夫です」と言うと、「おまえのことじゃない、本がだよ」とその恩師が言われたので、増田氏はハッとして自分はずぶぬれになりながら本にかさをさしたそうです。

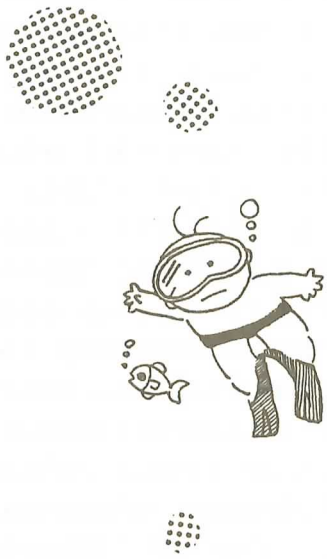
このように、学問をするには本を大切にするという心構えが大切なのです。

また学問をするには、才能よりも誠実さと根気が大事であると述べておられます。

この本を、私は大学生の頃読んだと思いますが、生活が楽ではなかった私は大いに勇気づけられ、また学問、勉強への真摯な姿勢というものを教えられました。

要は、人間というものは常に謙虚さを失わず、ひたむきに努力を続けることが大切であると思います。

本校の諸君も、在学中や卒業後も、よく読書をすることにより、専門を深めまた教養を広げ、そして人間性を養って下さい。



見　栄　読　書

土木工学科
大　橋　晶　良

高専生は本を読まないとよく言われるが、私も例外に漏れず、本校在学中に読んだ本は数少なく、あまり読まない人のために、「ミーハーのための見栄講座」に倣い見栄読書を考えてみた。

もし、本を読むことが好きな学生諸君であれば、本文を読む必要はないと思う。しかし、読書が好きでなく、読んだ本の数が少ないということで劣等感を持っている学生であれば、次のことを実行し見栄を張るのもよいかもしれない。

友達の部屋に入ったとき、書棚に本が多く並べてあり、自分のと比べて、本の内容・程度ではなく数・量で負けていたならば、多少はショックを受けるのではないだろうか。この対策としては、自分の方が友達よりも多く本を書棚に飾っていればよい訳だ。すなわち本をより多く買い並べればよい訳で、本を読まなくたって構わない。ただし、今現在は本をあまり持っていないのであるから、たくさんのお金がなければ一度に購入することはできない。そこで、友達が自分の部屋に入り本の話題になったときの言い訳を考えておくのだ。たとえば、「これこれの本読んだことがある？」と聞いてきたならば、「あー、あれはねー、図書室で借りて読んだよ」、「A君に借りて読んだよ」、「Bさんに貸して今ここにはないんだよ」と答えておき、徐々に購入すればよいであろう。読書に親しんでいない人は、自分なりの見栄読書を考えてみたらどうか。

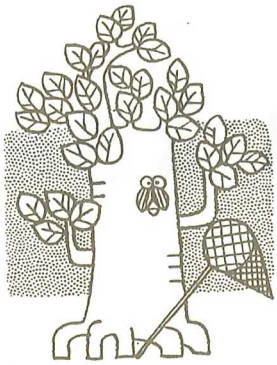
しかし、一生見栄を通すことができるだろうか。そして、もし見栄を張り通すことができたとしても、“他からよく見られる”だけであり、真の自分は自分のみが知り、空しさだけが残るのではないだろうか。それに、労せずして見栄を張ることはできない。多少の努力が要求されるだろう。たとえば、書棚に本があるわけだから、その本の書名と著者名および概要ぐらいは記憶せねばなるまい。ここまでして見栄を張る必要があるものかどうか。

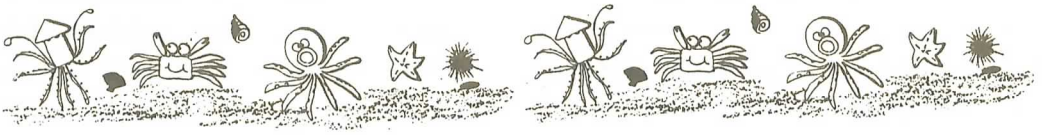
中3の男の子の家庭教師を学生時代にしたことがあるのだが、この子は、私と会うまでに教科書と漫画本以外の本を読んだことがないのだ。1年間にやっと1冊「どくとるマンボウ航海記」を読んでもらった。見栄を張る必要はないと思うのだが、これでは、あまりにも寂しい気がした。

吉村昭の「高熱隧道」は、高熱と闘い難工事のトンネル貫通した記録文学であり、読んだ時には土木工事のすさまじさを感じた。この本は授業で強制的に読まされたものであるが、あまり本を読まなかった私が、これ以後、割と本と共にする時間が多くなった。見栄や強制的にではなく、自ら本を読むようになったのである。

「ミーハーのための見栄講座」の終わりに、次のことが書かれている。

“スタートは「見栄」だって構いません。見栄を張って、恥をかいて、人から教えられて、自分が気がついて、ひとつ利口になって、ものを見る目がついて、やがであなたの見栄は、あなたの美学に変わってゆきます。”

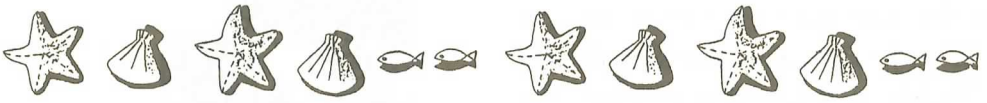




編　集　後　記

学生の中には開架図書だけが本校の蔵書だと思っている人がいる様ですが、開架図書の他に書庫に眠っている本がたくさんあります。特に小説等のほとんどは書庫にあるのではないでしょうか。これらの本は図書目録を調べれば、本校にあるかどうかわかります。

進路に悩んでいる人、恋に悩んでいる人、又、何をやってもおもしろくない、何をしていいかわからないと云っている人達、これらの本を読んでみてはどうでしょうか？幾冊かの本を読んでいるうちに解決の糸口が見つかるかもしれません。そして、感銘を受けた本、人にも推めたい本等がありましたら、是非、図書だよりに投稿して下さい。内容を簡単に書いただけでも結構です。



新着図書案内

＞0　総　　記＜

朝日年鑑　1984年版　朝日新聞社
中国年鑑　1984年版　中国新聞社
情報技術シリーズ　コロナ社
　3：システム工学（エレクトロニクス協議会）
パソコンマスター3週間　（丹羽　一夫）誠文堂新光社
プレイマイコンシリーズ　培風館
　1：BASIC
　3：アセンブリ・プログラミング
FORTRAN77　（坂野　匡弘）オーム社
情報管理のためのパーソナルドクメンテーション入門　（V．スティビッツ）　〃
東京大学教養講座　東京大学出版会
　6：偶然の科学
NHK海外シリーズ図書　日本放送出版協会
　チベット紀行
　ここはインドネシア
　レニングラード物語
　あすに挑む
　アメリカの証言
　アメリカの家族
岩波グラフィックス　岩波
　18：大阪城
　21：秩父〜峠・村・家
岩波セミナーブックス　〃
　1：コーランを読む
　2：ソシュールを読む
　3：「オデュッセイア」〜伝説と叙事詩
　4：「権利のための闘争」を読む
　5：サムエルソン経済学講義（上）
朝日選書　朝日新聞社
　223：がん細胞の誕生
　229：ジャパリッシュのすすめ
　230：陳独秀
　231：日本遠近〜ふだん着のパリ遊記
　232：日本人の質問
　233：漂泊の人良寛
　234：羽田空港の歴史
　238：危機を生きぬく(1)
　239：　〃　(2)
　240：逍遥游記
日本の古典名著・総解説　自由国民社
世界の古典名著・総解説　〃
中国の古典名著・総解説　〃
マイコンプログラミング500題
（田中　廣）日刊工業新聞社
図解マイコンのインターフェース
（平松・斉藤）オーム社
図解マイコンを使いこなすためのアセンブラ入門　（押野　崇芳）　〃
図解コンピュータシリーズPASCALプログラミング入門　（三沢・市川）　〃
図解コンピュータシリーズデータベース入門
（穂鷹　良介）　〃
図解マイコンのためのアセンブラ入門
（大原・倉田）　〃
図解マイクロコンピュータZ−80の使い方
（横田　英一）　〃
ライフサイエンスパソコンシリーズ
　4：実用プログラム集
（石居・河野・若林・和田・窪川）培風館
パソコングラフィックス入門
（大原・倉田・長谷川・加藤）オーム社
PC9800活用法　（柳澤・石郷岡）　〃
日本語ワードプロセッサの活用法
（山本　直三）ビジネス・オーム

＞1　哲　　学＜

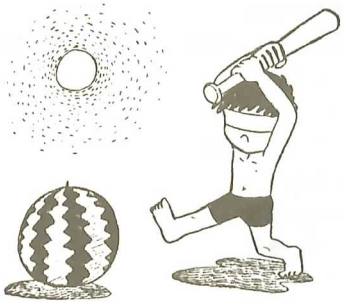
自然・文明・学問　（藤沢　令夫）紀伊國屋
ハクスレーの集中講義　（A．ハクスレー）人文書院
甦るルソー　（中川　久定）岩波
講座　現代の心理学　小学館
　2：人間の成長
神の沈黙　（矢島　文夫）人文書院
世界宗教史叢書　山川出版社
　8：仏教史(2)
創造的思考の技術　（J.L.アダムス）ダイヤモンド社

＞2　歴　　史＜

世界現代史　山川出版社
　8：東南アジア現代史　4
広島県史　現代通史　7　（広　島　県）広　島　県
年表日本歴史　筑　摩
　1：原始～飛鳥・奈良
　2：平安
　3：鎌倉・室町・戦国
新編西洋史辞典　（京大西洋史辞典編纂会）東京創元社
ロロロ伝記叢書　理　想　社
　マルクス
　ベートーヴェン
帝国書院＝ウェスターマン社　世界の環境アトラス　帝国書院
角川日本地名大辞典　角　川
　8：茨城県
空中写真日本　（西村　蹊二）朝　倉
シルクロード　ローマへの道　日本放送出版協会
　9：大草原をゆく；ソビエト(1)
各駅停車全国歴史散歩　河出書房新社
　14：千葉県
　18：石川県
　32：鳥取県
　45：大分県
　46：宮崎県

＞3　社会科学＜

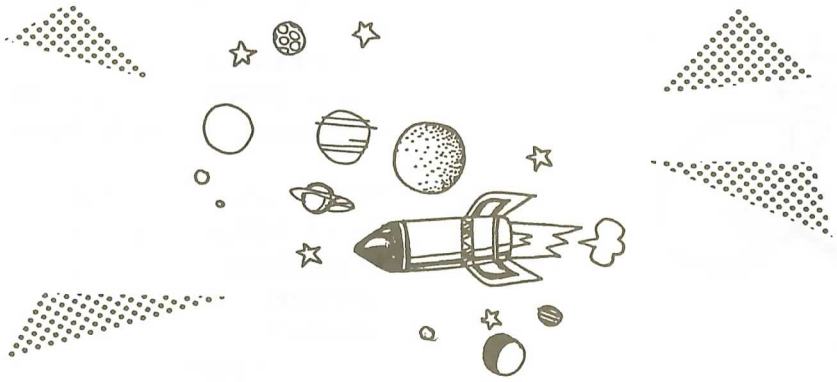
華北の交通史　（福田　英雄）TBSブリタニカ
実践オフィス・オートメーション　（山本　直三）青葉出版
ＬＰ概論　（砂田　吉一）中央経済社
国際連合世界統計年鑑1981(32集)　（国際連合統計局）原　書　房
マックス・ウェーバーと現代（中野　敏男）三一書房
教育学大全集　第一法規
　28：学習指導論
教育亡国　（林　竹二）筑　摩
よーし！それでいいぞ!!
　～育ちゆくものを育てる～　（ぎぼういさお）教育出版センター
民俗民芸双書　岩崎美術社
　81：アメリカ民話の世界
　82：北欧の神々と妖精たち
　83：羽前小国郷の伝承
　84：イギリスの民俗
　85：アメリカの民間伝承
　86：ドイツ民俗学
　87：植物と民俗
　88：木地屋の民俗
　89：村の民俗
　90：信仰と民俗
　91：瞽女の民俗
　92：生業と民俗
入門新書時事問題解説　教　育　社
　334：ASEAN　（小木曽　功）
　338：貿易戦争　（中尾　光昭）
　340：王族の国サウジアラビア　（岡倉　徹志）
　344：憲法九条と自衛隊法　（西　修）
　345：鄧小平と中国の権力構造（柴田　穂）
日本人は働きすぎか　（辻　謙）朝日ソノラマ



＞4　自然科学＜

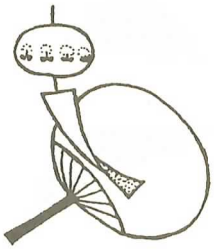
歴史としての科学　（村上陽一郎）筑　摩
代数・幾何　（石原　繁）裳　華　房
初等数学概論　（内海　庄三）建　帛　社
基礎の数学　（石原　繁）裳　華　房
工業基礎数学　東京書籍
　複素関数
　微分方程式
　代数幾何
　微分積分
基礎数学　（森　繁雄・早野雅三）　〃
数学入門シリーズ　岩　波
　1：代数への出発
　2：微積分への道
　3：複素数の幾何学
　4：2次行列の世界
　5：順列・組合せと確率

6：日常のなかの統計学
8：コンピュータ入門
線型計画法　（ソウルI．ガス）好学社
計画学のためのシステム解析法
（原田　實）技術書院
講座　数理計画法　産業図書
2：線形計画法入門
4：非線形最適化の理論
6：整数計画法
線形計画法入門　（森口　繁一）日科技連
数学とコンピュータシリーズ　東京電機大学出版局
1：電子計算機計算のしくみ
2：問題解決の手順流れ図
3：流れ図による数学の問題の考え方解き方
4：電卓のためのプログラミングの基礎
5：初歩からの数値計算
6：初歩からの確率統計
7：コンピュータのための数値解析
8：コンピュータのための線形解析
別冊：FORTRANの基礎
別冊：BASICの基礎
理工系基礎の数学　朝倉
11：数理計画
数値解析とFORTRAN第3版（渡部　力）丸善
サイエンスライブラリ情報電算機　サイエンス社
33：有限要素法による振動解析
アインシュタインの宇宙（N．コールダー）みすず書房
X線からクォークまで（エミリオ・セグレ）　〃
思想としての物理学の歩み（上，下）
（フリードリッヒ・フント）吉岡書店
新物理の散歩道　5　（ロゲルギスト）中央公論社
日常の物理学　（近角　聰信）東京書籍
高校課程物理　全訂版（上，下）
（原島　鮮）裳華房
物理入門コース　岩波
10：物理のための数学
朝永振一郎著作集　（朝永振一郎）みすず書房
9：マクロの世界からミクロの世界へ
10：量子電気力学の発展
11：量子力学と私
12：紀行と閑談
オックスフォード物理学シリーズ　丸善
12：原子核の物理
高校課程化学～理論編～　（長島　弘三）裳華房
高校課程化学～物質編～　（　〃　）　〃
化学結合を考える　（飯島　孝夫）講談社
化学のシステム～エネルギー・構造・反応
1，2，3，4　（J．A．キャンベル）丸善
宇宙からの眼　朝倉
地震の力学　（笠原　慶一）鹿島出版会
トキ～黄昏に消えた飛翔の詩～　教育社
岩波講座精神の科学　1～10　岩波
ノイローゼの積極的解決　（鈴木　知準）誠信書房
物理学One Point　共立出版
24：静電誘導　（中山　正敏）
化学One Point
1：活量とは何か　（玉虫　伶太）
2：核燃料　（石原　健彦）
3：アモルファス　（作花　済夫）
4：気体分子運動論　（西川　勝）
5：トライボロジー　（桜井　俊男）
6：相律と状態図　（吉岡甲子郎）
7：燃料電池　（高橋　武彦）
数学なんかやっつけろ　（和田　幸男）くろしお出版
創元クリニックシリーズ　創元社
8：アレルギーの話　（宮本　昭正）
基礎数学要項と演習　東京書籍
工業基礎数学微分積分要項と演習　〃
〃　代数幾何　〃　〃
〃　微分方程式　〃　〃
〃　複素関数　〃　〃
高専の数学1，2，3第3版　（田代，浅野）森北出版
新高専の数学1，2，3問題集　（田代　嘉宏）　〃



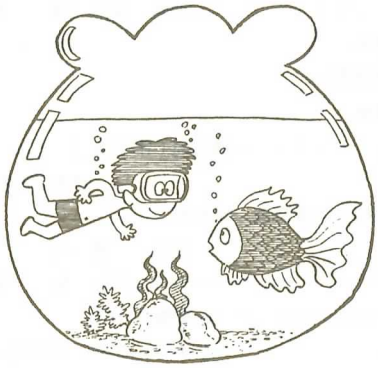
＞5　工　　学＜

現代システム工学の基礎　（浅居喜代治）オ　ー　ム　社
基礎システム理論　（古田　勝久）コ　ロ　ナ　社
システム工学の基礎　（椹木　義一）日　新　出　版
システム工学　（室津　義定）森　北　出　版
現代システム工学概論　（三浦　武雄）オ　ー　ム　社
システム工学の理論　（高原　康彦）日刊工業新聞社
総合エネルギー講座
（エネルギー変換懇話会）オ　ー　ム　社
1：エネルギー工学総論
2：エネルギー基礎工学
3：エネルギー資源工学
4：エネルギー蓄積輸送工学
5：エネルギー変換工学
6：エネルギー利用工学
7：エネルギー開発工学
8：エネルギー材料工学
有限要素法の基礎と応用シリーズ　培　風　館
1：有限要素法概論
8：流れと熱伝導の有限要素法入門
工業振動学演習　（神保　泰雄）学　献　社
構造解析学1，2　（小松　定夫）丸　善
骨組構造の静力学　（Alf　Pflüger）技　報　堂
破壊力学と材料強度講座　培　風　館
15：フラクトグラフィ
無人工学入門　（渡辺　茂）共　立　出　版
科学技術がわかる事典　（　〃　）日本実業出版社
最新科学技術のことがわかる本
（尾崎　正直）　〃
産業用ロボットの応用
（日本産業用ロボット工業会）日刊工業新聞社
ロボットエンジニアリング　（柴田　勉）　〃



信頼性工学講座　東京電機大学出版局
1：信頼性概論
2：信頼性の基礎数学
3：信頼性技術～設計・製造・使用
4：　〃　～試験と解析
5：信頼性管理
ある土木者像～いま・この人を見よ～
（飯吉　精一）技　報　堂
図解土木講座　〃
土質力学の基礎
新体系土木工学　〃
3：有限要素法
36：コンクリート構造物の維持・補修・取壊し
65：道路(5)
71：トンネル(2)
84：海洋土質
別巻：工事災害と安全対策
防災シリーズ　森　北　出　版
4：橋梁の耐風・耐震
コンピュータによる工事積算　改訂版
（嶋　廣二）経　済　調　査　会
新しい耐震設計入門　（福岡　正巳）近　代　図　書
土木技術者のための岩石・岩盤図鑑
（三木　幸蔵）鹿　島　出　版　会
新しい土圧入門　（福岡　正巳）近　代　図　書
わかりやすい土の力学　（今井　五郎）鹿　島　出　版　会
土質工学演習　応用編　（河上　房義）森　北　出　版
土の調べ方入門　土　質　工　学　会
現場技術者のための土と基礎シリーズ　〃
6：建設工事に伴う公害とその対策
レオンハルトのコンクリート講座　鹿　島　出　版　会
5：プレストレストコンクリート
6：コンクリート橋（F．レオンハルト）
写真による三次元測定（日本写真測量学会）共　立　出　版
写真測量の実際　新版　（木本　氏寿）山　海　堂
教程基準点測量　（斉藤　博）　〃
チェックポイントに基づく土木施工管理の実務　〃
1：工事測量設計
トンネル工事用機械　（小竹　秀雄）　〃
わが国におけるトンネル掘進機の実績と展望
土　木　学　会
水道とトリハロメタン　（丹保　憲仁）技　報　堂
スミッソンの都市論　（A．スミッソン）彰　国　社
人と車の共存道路　（天野　光三）技　報　堂
みどりの挑戦　（塩島　大）鹿　島　出　版　会
日本のインフラストラクチャー
（J.E.S.プロジェクトルーム）日刊工業新聞社

鈴木恂メキシコ・スケッチ　（鈴木　恂）丸　善
世界の都市と建築情報　新建築社
　アジア・アフリカ編
　南北アメリカ編
　ヨーロッパ編
半過去の建築から　（木島　安史）鹿島出版会
近代建築ガイドブック　関東編
　（東京建築探偵団）　〃
環境建築論序説　（瀬尾　文彰）彰国社
外部空間の設計　（芦原　義信）　〃
図説建築用語事典　（冨塚　信司）実教出版
建築への誘い～先駆者10人の歩んだ道
　（近江　栄，宇野英隆）朝倉
建築論～日本的空間へ～　（黒川　紀章）鹿島出版会
今昔「飛騨から裏日本へ」～タウトの見たもの～　（笹間　一夫）井上書院
ルイス・カーン　（ルイス　I. カーン）
　A.D.A.EDITA Tokyo
アルヴァ・アアルト（アルヴァ・アアルト）　〃
人間・建築・環境六書　彰国社
　3：運動と変化
　4：人間と環境
　5：情報と創造
　6：歴史と未来
ＳＤ選書　鹿島出版会
　183：ゴシック建築の構造
　184：建築家なしの建築
都市の明治　（初田　亨）筑摩
講座ルイス・カーン　（工藤　国雄）明現社
現代建築家　（鈴木　博之）晶文社
悲喜劇・一九三〇年代の建築と文化　現代企画室
ル・コルビュジエ　（八束はじめ）岩波
英国建築物語　（ヒュー・ブラウン）晶文社
ボザール：その栄光と歴史　（ＳＤ編集部）鹿島出版会
構造計画　（末永　保美）朝倉
木造住宅の実際知識　改訂　（内田　京治）泰流社
ＧＡ　Houses～世界の住宅～15　A.D.A.EDITA Tokyo
住宅建築設計例集　建築資料研究社
　8：床の間廻り詳細
電気設備事典　産業調査会
日本のインテリア　改訂版　（神代雄一郎）井上書院
標準機械工学講座　コロナ社
　1：機械要素(1)
　2：　〃　(2)改訂
　13：伝熱論
最新機械工学講座　産業図書
　機構学
新編機械工学講座　コロナ社
　11：機構学



　14：機械工作法(1)
　15：　〃　(2)
新編機械工学講座・新編電気工学講座　コロナ社
　33：システム工学
機械系大学講義シリーズ　〃
　27：機械加工学
朝倉機械工学全書　朝倉
　19：ガスタービン
機械工学基礎シリーズ　〃
　11：エレクトロニクス入門
機械工学講座　共立出版
　21：ガスタービンおよびジェットエンジン
　（改訂版）
最新機械工学演習集成　学献社
　2：機械設計演習
機械力学演習　改訂版　（亘理　厚）共立出版
メカニズムの事典　（伊藤　茂）理工学社
ねじ締結の理論と計算　（山本　晃）養賢堂
軸受　（曽田　範宗）岩波
トラブルのない歯車　（大山　政一）技術評論社
歯車の強さ計算法　（仙波　正荘）日刊工業新聞社
固体潤滑ハンドブック　（津谷　裕子）幸書房
トライボロジ　（松原　清）産業図書
やさしいCAD/CAN　（松島　克守）工業調査会
機械設計演習　増補版　（岩波　繁蔵）産業図書
大学演習機械要素設計　改訂版
　（吉沢　武男）裳華房
JIS 機械製図の基礎と演習　（熊谷　信男）共立出版
機械図集パッキンおよびガスケット　日本機械学会
機械要素設計演習　（足立　勝重）槇書店

機械加工　（中山　一雄）朝　倉
ヒートパイプとその応用
（山西哲夫，清水定明）オ　ー　ム　社
スターリングエンジンの開発（一色　尚次）工業調査会
キャビテーション　（加藤　洋治）槇　書　店
精密工学講座　コ　ロ　ナ　社
4：精密機素(1)
航空工学講座
11：ジェット・エンジン構造編（第2版）
日本航空技術協会
電子通信英和・和英辞典　新訂版
（平山　博）共　立　出　版
光通信システム　（テレビジョン学会）昭　晃　堂
マイクロ・エレクトロニクスの衝撃～ILO
レポート～　（J．レーダ）日本能率協会
オプトエレクトロニクス入門（桜庭　一郎）森　北　出　版
エレクトロニクス革命（ミカエル・オーム）日本能率協会
電子工学進歩シリーズ　コ　ロ　ナ　社
5：データ通信
マイクロコンピュータの事典（田丸　啓吉）朝　倉
マイクロコンピュータハンドブック
（森　亮一）　〃
アモルファス合金　（増本　健，深道和明）ア　グ　ネ
金属を知る事典　（「金属」編集部）　〃
セラミックスを知る事典　（作花　済夫）　〃
初級セラミックス学　（曽我　直弘）　〃
住居と生活　（金子　幸子）学　芸　図　書
マイクロコンピュータ応用事例集成
（加藤　友彦）新技術開発センター
新素材をどう読むか　（青柳　全）日刊工業新聞社
これからの中小建設業経営　（山城　章）
経済調査会出版部

構造物基礎の設計計算演習　土質工学会
下水道技術マニュアル（廣田，畑田，福嶋）近　代　図　書
下水道技術検定法規問題の解説
（下水道技術研究会）　〃
鎮守の森　（上田　篤）鹿島出版会
建築のことば　（竹山　実）　〃
庭のたのしみ（アンヌ・スコット－ジェイムズ）　〃
建築技術選書　学芸出版社
36：日本壁　（山田　幸一）
日影規制の基礎講座　日本建築士連合会
大阪の建築ガイドブック　大阪府建築士会
これがスペースシャトルだ
（宇宙開発情報研究会）講　談　社
原子力発電とはなにか　（緑　の　会）野　草　社
技術革新の衝撃
（通商産業省工業技術院総務部技術調査課）日本能率協会
絵でみるエレクトロニクス読本
（緒方　健二）日刊工業新聞社
音を100倍良くするマイ・オーディオチェック
（太田　一穂）誠文堂新光社
センサ入門（図解メカトロニクス入門シリーズ）
（雨宮　好文）オ　ー　ム　社

＞6　産　業＜

農業土木ハンドブック　改訂4版
（農業土木学会）丸　善
造園の空間と構成　（鈴木　昌道）誠文堂新光社
庭園の設計　（永嶋　正信）理　工　図　書
景観計画　（マイケル・ローリー）鹿島出版会
庭の見取図・平面図集　（斉藤　勝雄）技　報　堂
日本の鉄道100年の話　（沢　和哉）筑　地　書　館
テレビのなかの外国文化　（川竹　和夫）
日本放送出版協会
NHKウルトラアイ　〃
1：からだと健康大研究
2：食べ物大研究

＞7　芸　術＜

岩波美術館テーマ館　11　岩　波
アートペインティングライブラリー　美術出版社
油彩技法
1：油彩画の基本技法
2：　〃　の風景技法
3：　〃　の海景技法
油彩人物画技法
2：子供の描き方
クロッキー技法
1：クロッキーの基本
3：クロッキー着衣と裸婦
水彩技法
1：水彩画の基本技法
2：　〃　の風景技法
レタリング入門　アルファベット
（中田　功）　〃
ヨーロッパの窓　2　（遠山　孝之）　〃
デザイン　（美術手帳増刊号編集部）　〃
井伊家伝来能面百姿　（増田　正造）平　凡　社

＞9　文　学＜

現代作家辞典　新版
（大久保典夫，吉田凞生）東　京　堂
古典を読む　岩　波
8：かげろふ日記　（大原　富枝）
9：一茶句集　（金子　兜太）
10：古事記　（益田　勝実）
山本周五郎全集　新　潮　社
2：小説日本婦道記・柳橋物語
3：おたふく物語・楽天旅日記
4：寝ぼけ署長・火の杯
5：山彦乙女・花も刀も
6：風流太平記
7：栄花物語
8：正雪記
9：樅の木は残った（上）
10：　〃　（下）
11：赤ひげ診療譚・五瓣の椿
12：天地静大
13：彦左衛門外記・平安喜遊集
14：青べか物語・季節のない街
15：虚空遍歴
16：さぶ・おごそかな渇き
17：ながい坂
18：須磨寺附近・城中の霜
19：蕭々十三年・水戸梅譜

20：晩秋・野分
21：菊匂う・上野介正信
22：契りきぬ・落ち梅記
23：雨あがる・竹柏記
24：よじょう・わたくしです物語
25：三十ふり袖・みずぐるま
26：釣忍・ほたる放生
27：将監さまの細みち・並木河岸
28：ちいさこべ・落葉の隣り
29：おさん・あすなろう
30：小説の効用・雨のみちのく
完訳日本の古典　小　学　館
3：萬葉集(2)
35：新古今和歌集(1)
36：　〃　(2)
56：近松門左衛門集
志賀直哉全集8～10　岩　波
新編悪魔の辞典　（アンブローズ・ビアス）　〃
重い遺産　（斎藤　宏保）祥　伝　社

岩　波　新　書

247：日本の巨大企業　（中村　孝俊）
248：宝石は語る～地下からの手紙～
（砂川　一郎）
249：近代日本の民間学　（鹿野　政直）
250：楽譜の風景　（岩城　宏之）
251：ILO条約と日本　（中山　和久）
252：お伊勢まいり　（西垣　晴次）
253：「ベトナム以後」を歩く
（小田　実）
254：転機に立つ石油化学工業
（渡辺徳二，佐伯康治）
255：10代の子を持つ親の本（J．ウェルズ）
256：日本の国鉄　（原田　勝正）

257：スコットランドの小さな学校
　　～子どもの教育と福祉（野村　庄吾）
258：記号論への招待　（池上　嘉彦）
259：靖国神社　（大江志乃夫）
260：科学の哲学　（柳瀬　睦男）

岩波ジュニア新書

68：書く力をつけよう　（工藤　信彦）
69：英語辞書の使いかた　（外山滋比古）
70：モーツアルト　（柴田治三郎）
71：自然観察12ケ月　（河野　和男）
72：平均順位偏差値　（吉村　功）
73：頭脳トレーニング　（有澤　誠）
74：図形にアタック！　（石田　信）

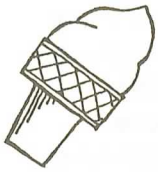
カラーブックス

625：日本の私鉄　㉙都市の電車
626：健康相談　①目の病気
627：写真忠臣蔵
628：鉢植えと盆栽仕立て
629：マジック入門
630：ホテルの味・東京
631：日本の私鉄　㉚都市の電車
632：越前竹人形
633：東京わが町
634：地下鉄銀座線各駅停車
635：春植え球根
636：ビタミンE
637：近鉄線各駅停車(I)奈良・生駒線
638：春の草花花壇
639：日本の市章（東日本）

新潮文庫

リーダーの条件　（会田　雄次）
自註鹿鳴集　（会津　八一）
青島の意地悪議員日記　（青島　幸男）
ノミの反乱　（　〃　）
春の城　（阿川　弘之）
雲の墓標　（　〃　）
山本五十六　（　〃　）
南蛮阿房列車　（　〃　）
米内光政　（　〃　）
軍艦長門の生涯　（　〃　）
羅生門・鼻　（芥川龍之介）
地獄変・偸盗　（　〃　）
蜘蛛の糸・杜子春　（　〃　）
奉教人の死　（　〃　）
戯作三昧・一魂の土　（　〃　）
河童・或阿呆の一生　（　〃　）
侏儒の言葉・西方の人　（　〃　）
お笑いを一席　（阿刀田高ほか）
他人の顔　（安部　公房）
壁　（　〃　）
けものたちは故郷をめざす（　〃　）
飢餓同盟　（　〃　）
第四間氷期　（　〃　）
幽霊はここにいる・どれい狩り
　　（　〃　）
水中都市・デンドロカカリヤ（　〃　）
無関係な死・時の崖　（　〃　）
R62号の発明・鉛の卵　（　〃　）
石の眼　（　〃　）
終りし道の標べに　（　〃　）
人間そっくり　（　〃　）
夢の逃亡　（　〃　）
燃えつきた地図　（　〃　）
砂の女　（　〃　）
箱男　（　〃　）
或る女　（有島　武郎）
惜みなく愛は奪う　（　〃　）
小さき者へ・生れ出づる悩み
　　（　〃　）
紀ノ川　（有吉佐和子）
香華　（　〃　）
助左衛門四代記　（　〃　）
地唄　（　〃　）
私は忘れない　（　〃　）
華岡青洲の妻　（　〃　）
海暗　（　〃　）
一の糸　（　〃　）
不信のとき　（　〃　）

美っつい庵主さん　（有吉佐和子）
三婆　（　〃　）
複合汚染　（　〃　）
芝桜　（　〃　）
鬼怒川　（　〃　）
木瓜の花　（　〃　）
針女　（　〃　）
恍惚の人　（　〃　）
百人一首　（安東　次男）
私の食物誌　（池田弥三郎）
編笠十兵衛　（池波正太郎）
忍者丹波大介　（　〃　）
男振　（　〃　）
俠客　（　〃　）
剣の天地　（　〃　）
食卓の情景　（　〃　）
闇の狩人　（　〃　）
上意討ち　（　〃　）
散歩のとき何か食べたくなって
（　〃　）
闇は知っている　（　〃　）
雲霧仁左衛門　（　〃　）
逆転　（伊佐　千尋）
焼跡のイエス・処女懐胎　（石川　淳）
紫苑物語　（　〃　）
石川啄木集　（古谷　綱武）
一握の砂・悲しき玩具　（石川　啄木）
結婚の生態　（石川　達三）
日蔭の村　（　〃　）
望みなきに非ず　（　〃　）
転落の詩集・智慧の青草　（　〃　）
蒼氓（そうぼう）　（　〃　）
幸福の限界　（　〃　）
泥にまみれて　（　〃　）
風にそよぐ葦　（　〃　）
薔薇と荊の細道　（　〃　）
自分の穴の中で　（　〃　）
神坂四郎の犯罪　（　〃　）
青色革命　（　〃　）
四十八歳の抵抗　（　〃　）
人間の壁　（　〃　）
悪女の手記　（　〃　）
傷だらけの山河　（　〃　）
愛の終りの時　（　〃　）
酒落た関係　（　〃　）
青春の蹉跌　（　〃　）
生きている兵隊　（　〃　）
僕たちの失敗　（　〃　）
開き過ぎた扉　（　〃　）



若き日の倫理　（石川　達三）
金環蝕　（　〃　）
人間と愛と自由　（　〃　）
最後の共和国　（　〃　）
約束された世界　（　〃　）
青春の奇術　（　〃　）
時代の流れとともに　（　〃　）
解放された世界　（　〃　）
誘惑　（　〃　）
愉しかりし年月　（　〃　）
その最後の世界　（　〃　）
充たされた生活　（　〃　）
生きるための自由　（　〃　）
独りきりの世界　（　〃　）
若い人　（石坂洋次郎）
あじさいの歌　（　〃　）
青い山脈　（　〃　）
美しい暦　（　〃　）
何処へ　（　〃　）
暁の合唱　（　〃　）
山のかなたに　（　〃　）
丘は花ざかり　（　〃　）
山と川のある町　（　〃　）
わが日わが夢　（　〃　）
霧の中の少女　（　〃　）
陽のあたる坂道　（　〃　）
あいつと私　（　〃　）
光る海　（　〃　）
麦死なず　（　〃　）
太陽の季節　（石原慎太郎）
完全な遊戯　（　〃　）
行為と死　（　〃　）
挑戦　（　〃　）
化石の森　（　〃　）

歌行燈・高野聖	（泉　鏡花）
内灘夫人	（五木　寛之）
風に吹かれて	（　〃　）
ゴキブリの歌	（　〃　）
にっぽん三銃士	（　〃　）
変奏曲	（　〃　）
鳩を撃つ	（　〃　）
地図のない旅	（　〃　）
戒厳令の夜	（　〃　）
ソフィアの秋	（　〃　）
海を見ていたジョニー	（　〃　）
朱鷺の墓	（　〃　）
男と女のあいだには	（　〃　）
さらばモスクワ愚連隊	（　〃　）
野菊の墓	（伊藤左千夫）
現代詩の鑑賞	（伊藤　信吉）
詩のふるさと	（　〃　）
現代名詩選	（　〃　）
イカルス失墜	（伊藤　整）
典子の生きかた	（　〃　）
氾濫	（　〃　）
若い詩人の肖像	（　〃　）
青春	（　〃　）
伊藤整詩集	（　〃　）
小説の方法	（　〃　）
一千一秒物語	（稲垣　足穂）
万葉の人びと	（犬養　孝）
新約聖書物語	（犬養　道子）
ブンとフン	（井上ひさし）
表裏源内蛙合戦	（　〃　）
道元の冒険	（　〃　）
ドン松五郎の生活	（　〃　）
日本亭主図鑑	（　〃　）
偽原始人	（　〃　）
新釈遠野物語	（　〃　）
浅草鳥越あずま床	（　〃　）
珍訳聖書	（　〃　）
下駄の上の卵	（　〃　）
地の群れ	（井上　光晴）
丸山蘭水楼の遊女たち	（　〃　）
猟銃・闘牛	（井上　靖）
ある偽作家の生涯	（　〃　）
あした来る人	（　〃　）
敦煌	（　〃　）
あすなろ物語	（　〃　）
黒い蝶	（　〃　）
風林火山	（　〃　）
詩集　北国	（　〃　）
射程	（　〃　）
氷壁	（井上　靖）
天平の甍	（　〃　）
しろばんば	（　〃　）
蒼き浪	（　〃　）
楼蘭	（　〃　）
憂愁平野	（　〃　）
姨捨	（　〃　）
風濤	（　〃　）
夏草冬濤	（　〃　）
額田女王	（　〃　）
後白河院	（　〃　）
幼き日のこと・青春放浪	（　〃　）
西域物語	（　〃　）
四角な船	（　〃　）
少年・あかね雲	（　〃　）
夜の声	（　〃　）
北の海	（　〃　）
道・ローマの宿	（　〃　）
多甚古村	（井伏　鱒二）
山椒魚	（　〃　）
遥拝隊長・本日休診	（　〃　）
集金旅行	（　〃　）
駅前旅館	（　〃　）
黒い雨	（　〃　）
ぼうふら漂遊記	（色川　武大）
男のためのヤセル本	（岩城　宏之）
海潮音	（上田　敏）
がむしゃら1500キロ	（浮谷東次郎）
小説の味わい方	（臼井　吉見）
色ざんげ	（宇野　千代）
おはん	（　〃　）
桜島・日の果て	（梅崎　春生）
隠された十字架	（梅原　猛）
文学と私・戦後と私	（江藤　淳）
決定版　夏目漱石	（　〃　）

江戸川乱歩傑作選　（江戸川乱歩）
監督　（海老沢泰久）
妖　（円地　文子）
女坂　（　〃　）
朱を奪うもの　（　〃　）
傷ある翼　（　〃　）
女面　（　〃　）
なまみこ物語　（　〃　）
虹と修羅　（　〃　）
源氏物語　（　〃　）
食卓のない家　（　〃　）
白い人・黄色い人　（遠藤　周作）
海と毒薬　（　〃　）
留学　（　〃　）
月光のドミナ　（　〃　）
大変だァ　（　〃　）
牧歌　（　〃　）
影法師　（　〃　）
母なるもの　（　〃　）
ピエロの歌　（　〃　）
彼の生きかた　（　〃　）
ボクは好奇心のかたまり　（　〃　）
砂の城　（　〃　）
走馬燈　（　〃　）
悲しみの歌　（　〃　）
沈黙　（　〃　）
イエスの生涯　（　〃　）
死者の奢り・飼育　（大江健三郎）
われらの時代　（　〃　）
芽むしり仔撃ち　（　〃　）
性的人間　（　〃　）
遅れてきた青年　（　〃　）
日常生活の冒険　（　〃　）
空の怪物アグィー　（　〃　）
見るまえに跳べ　（　〃　）
われらの狂気を生き延びる道を教えよ
（　〃　）
個人的な体験　（　〃　）
ピンチランナー調書　（　〃　）
俘虜記　（大岡　昇平）
武蔵野夫人　（　〃　）
野火　（　〃　）
花影　（　〃　）
愛について　（　〃　）
酸素　（　〃　）
少年　（　〃　）
事件　（　〃　）
無罪　（　〃　）
青春失恋記　（太田　治子）

日本語の年輪　（大野　晋）
婉という女　（大原　富枝）
亜紀子　（　〃　）
野獣死すべし　（大藪　春彦）
血の来訪者　（　〃　）
ウィンチェスターM70　（　〃　）
絶望の挑戦者　（　〃　）
戦いの肖像　（　〃　）
血まみれの野獣　（　〃　）
人狩り　（　〃　）
探偵事務所23　（　〃　）
血の罠　（　〃　）
観光バスの行かない…　（岡部伊都子）
老妓抄　（岡本かの子）
或る聖書　（小川　国夫）
アポロンの島　（　〃　）
試みの岸　（　〃　）
小川未明童話集　（小川　未明）
女が職場を去る日　（沖藤　典子）
奥の細道ノート　（荻原井泉水）
小椋佳いたずらに　（小椋　佳）
暢気眼鏡　（尾崎　一雄）
虫のいろいろ　（　〃　）
金色夜叉　（尾崎　紅葉）
人生劇場　青春篇　（尾崎　士郎）
人生劇場　愛欲篇　（　〃　）
帰郷　（大佛　次郎）
ボクの音楽武者修行　（小澤　征爾）
夫婦善哉　（織田作之助）
平将門　（観音寺潮五郎）
西郷と大久保　（　〃　）
幕末動乱の男たち　（　〃　）
おどんな日本一　（　〃　）
二本の銀杏　（　〃　）

パニック・裸の王様　（開高　健）
日本三文オペラ　（　〃　）
ロビンソンの末裔　（　〃　）
フィッシュ・オン　（　〃　）
新しい天体　（　〃　）
開口閉口　（　〃　）
地球はグラスのふちを回る（　〃　）
歩く影たち　（　〃　）
輝ける闇　（　〃　）
フランドルの冬　（加賀　乙彦）
宣告　（　〃　）
檸檬　（梶井基次郎）
女の警察　（梶山　季之）
加藤登紀子　この瞬間を愛せよ
（加藤登紀子）
愛の生活　（金井美恵子）
夢の時間　（　〃　）
大和古寺風物誌　（亀井勝一郎）
人生論・幸福論　（　〃　）
日本のアウトサイダー　（河上徹太郎）
雪国　（川端　康成）
伊豆の踊子　（　〃　）
花のワルツ　（　〃　）
愛する人達　（　〃　）
掌の小説　（　〃　）
舞姫　（　〃　）
千羽鶴　（　〃　）
山の音　（　〃　）
川のある下町の話　（　〃　）
女であること　（　〃　）
虹いくたび　（　〃　）
みずうみ　（　〃　）
名人　（　〃　）
眠れる美女　（　〃　）
古都　（　〃　）
新文章読本　（　〃　）
愛・自由・幸福　（河盛　好蔵）
人とつき合う法　（　〃　）

藤十郎の恋・恩讐の彼方に（菊池　寛）
父帰る・屋上の狂人　（　〃　）
硫黄島・あゝ江田島　（菊村　到）
日本の書物　（紀田順一郎）
夜と霧の隅で　（北　杜夫）
幽霊　（　〃　）
どくとるマンボウ航海記　（　〃　）
どくとるマンボウ昆虫記　（　〃　）
船乗りクプクプの冒険　（　〃　）
楡家の人びと　（　〃　）
遥かな国遠い国　（　〃　）
高みの見物　（　〃　）
南太平洋ひるね旅　（　〃　）
星のない街路　（　〃　）
奇病連盟　（　〃　）
あくびノオト　（　〃　）
天井裏の子供たち　（　〃　）
へそのない本　（　〃　）
マンボウおもちゃ箱　（　〃　）
月と10セント　（　〃　）
黄いろい船　（　〃　）
マンボウぼうえんきょう　（　〃　）
木精　（　〃　）
マンボウ周遊券　（　〃　）
白きたおやかな峰　（　〃　）
ぼくのおじさん　（　〃　）
さびしい王様　（　〃　）
酔いどれ船　（　〃　）
北原白秋詩集　（神西　清）
夕鶴・彦市ばなし　（木下　順二）
ことばの歳時記　（金田一春彦）
草野心平詩集　（豊島与志雄）
武蔵野　（国木田独歩）
牛肉と馬鈴薯・酒中日記　（　〃　）
学生時代　（久米　正雄）
出家とその弟子　（倉田　百三）
婚約　（倉橋由美子）
暗い旅　（　〃　）
ヴァージニア　（　〃　）
妖女のように　（　〃　）
夢のなかの街　（　〃　）
パルタイ　（　〃　）
反悲劇　（　〃　）
聖少女　（　〃　）
ギリシア神話　（呉　茂一）
休日の断崖　（黒岩　重吾）
真昼の罠　（　〃　）
背徳のメス　（　〃　）
象牙の穴　（　〃　）

青春をスキーに　（黒岩　達介）
失われた古代大陸　（黒沼　　健）
七人の予言者　（　〃　）
三等重役　（源氏　鶏太）
鬼の居ぬ間　（　〃　）
鏡　（　〃　）
新サラリーマン読本　（　〃　）
天上大風　（　〃　）
実は熟したり　（　〃　）
夢を失わず　（　〃　）
停年退職　（　〃　）
男性無用　（　〃　）
男と女の世の中　（　〃　）
家庭との戦い　（　〃　）
口紅と鏡　（　〃　）
掌の中の卵　（　〃　）
歌なきものの歌　（　〃　）
女の顔　（　〃　）
時計台の文字盤　（　〃　）
ずこいきり　（　〃　）
若い海　（　〃　）
湖畔の人　（　〃　）
新・三等重役　（　〃　）
レモン色の月　（　〃　）
小泉八雲集　（小泉　八雲）
父・こんなこと　（幸田　　文）
流れる　（　〃　）
おとうと　（　〃　）
黒い裾　（　〃　）
北愁　（　〃　）
幼児狩り・蟹　（河野多恵子）
まかり通る　（小島　直記）
東京海上ロンドン支店　（　〃　）
アメリカン・スクール　（小島　信夫）
ガン病棟の九十九日　（児玉　隆也）
蟹工船・党生活者　（小林多喜二）
唐獅子株式会社　（小林　信彦）
神野推理氏の華麗な冒険　（　〃　）
ビートルズの優しい夜　（　〃　）
日本の喜劇人　（　〃　）
Xへの手紙・私小説論　（小林　秀雄）
作家の顔　（　〃　）
ドストエフスキイの生活　（　〃　）
モオツァルト・無常という事
（　〃　）
近代絵画　（　〃　）
地球になった男　（小松　左京）
アダムの裔　（　〃　）
戦争はなかった　（　〃　）

闇の中の子供　（小松　左京）
時間エージェント　（　〃　）
夢からの脱走　（　〃　）
物体0　（　〃　）
春の軍隊　（　〃　）
おしゃべりな訪問者　（　〃　）
はみだし生物学　（　〃　）
秘剣・柳生連也斎　（五味　康祐）
柳生武芸帳　（　〃　）
薄桜記　（　〃　）
五味康祐　音楽巡礼　（　〃　）
お吟さま　（今　　東光）
悪名　（　〃　）
微笑　（近藤啓太郎）
白痴　（坂口　安吾）
くれない　（佐多　稲子）
素足の娘　（　〃　）
体の中を風が吹く　（　〃　）
さだまさし　時のほとりで（さだまさし）
さだまさし　旅のさなかに（　〃　）
ドタンバのマナー　（サトウサンペイ）
田園の憂鬱　（佐藤　春夫）
佐藤春夫詩集　（島田　謹二）
多情仏心　（里見　　弴）
北海道の旅　（更科　源蔵）
人の砂漠　（沢木耕太郎）
永遠なる序章　（椎名　麟三）
美しい女　（志賀　直哉）
チェーザレ・ボルジア　あるいは優雅なる
冷酷　（塩野　七生）
和解　（志賀　直哉）
暗夜行路　（　〃　）
清兵衛と瓢箪・網走まで　（　〃　）
小僧の神様・城の崎にて　（　〃　）
灰色の月・万暦赤絵　（　〃　）
娘と私　（獅子　文六）
贈る言葉　（柴田　　翔）
鳥の影　（　〃　）
立ち盡す明日　（　〃　）
ノンちゃんの冒険　（　〃　）
燕のいる風景　（　〃　）
剣は知っていた　（柴田錬三郎）
江戸群盗伝　（　〃　）

美男城　（柴田錬三郎）
眠狂四郎無頼控　（　〃　）
眠狂四郎独歩行　（　〃　）
眠狂四郎殺法帖　（　〃　）
孤剣は折れず　（　〃　）
赤い影法師　（　〃　）
運命峠　（　〃　）
剣鬼　（　〃　）
眠狂四郎孤剣五十三次　（　〃　）
眠狂四郎虚無日誌　（　〃　）
眠狂四郎無情控　（　〃　）
眠狂四郎異端状　（　〃　）
梟の城　（司馬遼太郎）
風神の門　（　〃　）
人斬り以蔵　（　〃　）
国盗り物語　（　〃　）
燃えよ剣　（　〃　）
新史　太閤記　（　〃　）
関ケ原　（　〃　）
峠　（　〃　）
花神　（　〃　）
城塞　（　〃　）
果心居士の幻術　（　〃　）
馬上少年過ぐ　（　〃　）
覇王の家　（　〃　）
歴史と視点　（　〃　）
出発は遂に訪れず　（島尾　敏雄）
死の棘　（　〃　）
嵐・ある女の生涯　（島崎　藤村）
春　（　〃　）
桜の実の熟する時　（　〃　）
家　（　〃　）
破戒　（　〃　）
夜明け前　（　〃　）
千曲川のスケッチ　（　〃　）
新生　（　〃　）
藤村詩集　（　〃　）
勝海舟　（子母沢　寛）
次郎物語　（下村　湖人）
青年の思索のために　（　〃　）
プールサイド小景・静物　（庄野　潤三）

総会屋錦城　（城山　三郎）
役員室午後三時　（　〃　）
雄気堂々　（　〃　）
ある倒産　（　〃　）
生命なき街　（　〃　）
小説日本銀行　（　〃　）
乗取り　（　〃　）
真昼のワンマン・オフィス（　〃　）
毎日が日曜日　（　〃　）
官僚たちの夏　（　〃　）
打出小槌町一番地　（　〃　）
素直な戦士たち　（　〃　）
黄金の日日　（　〃　）
魚と伝説　（末広　恭雄）
ビッグマン愚行録　（鈴木　健二）

三一新書

現代人の読書　（紀田順一郎）
私の人生を決めた一冊の本
（三一書房編集部）
流行語・隠語辞典　（塩田　勝）
面白びっくり大全集 PARTⅠ・Ⅱ・Ⅲ
（丸山　尚）
ものの見方・考え方　（故　縄）
哲学入門　（ポリッツェル）
音楽はどう思想を表現するか
（フィンケルシュタイン）
死とは何か　（関　貞夫）
若き日の疑問　（林田　茂雄）
自殺論　（　〃　）
女のよろこび　（石垣　綾子）
若い日の生き方　（中岡　哲郎）
幻想的な日本人論　（佐野美津男）
殺人者の意志　（鎌田　忠良）
十七歳の死　（亀川正春・畠中千畝）
一日一日の人生論　（久我　利男）
禅入門　（佐橋　法龍）
本願寺　（森　竜吉）
親鸞　その思想史　（　〃　）
池田大作　権力者の構造　（溝口　敦）
現代日本女性史　（井上　清）
イエス・キリスト　（土井　正興）
新版　日本女性史　（井上　清）
歴史とはなにか　（山崎　謙）
邪馬台国論争　上，下　（原田　大六）
天皇家の歴史　上，下　（ねずまさし）
天皇と昭和史　上，下　（　〃　）
開国の精神　（紀田順一郎）
日本現代史(1)〜(7)　（ねずまさし）

明治百年100大事件（上）（下）
（松本　清張）
戦国暗殺史　（森川　哲郎）
江戸暗殺史　（　〃　）
幕末暗殺史　（　〃　）
明治暗殺史　（　〃　）
現代暗殺史　（　〃　）
増補　アイヌ民族抵抗史　（新谷　行）
父よ母よ，僕はいま　（真野　博行）
現代のアナキズム　（D. ゲラン）
全学連　（中島　誠）
日本共産党はどこへ行く　（片山さとし）
反安保の論理　（具島兼三郎）
都市計画とはなにか　（吉野　正治）
牢獄の思想　（紀田順一郎）
職業と人生への問い　（加藤　尚文）
ヒトラーの世界　（赤間　剛）
増補　日本の反逆思想　（秋山　清）
人間のための都市の計画　（吉野　正治）
現代日本の差別意識　（堀口　牧子）
狭山事件　無罪の新事実
（亀井トム，栗崎ゆたか）
現代への視角
（松田道雄　五木寛之　久野収）
恋愛論　（河野　信子）
中国　アナキズムの影　（玉川　信明）
階級意識とは何か　（W. ライヒ）
弁証法の論理　（山崎　謙）
新社会科学入門　上，下　（高畠　通敏）
人間・労働・技術　（久野収，星野芳郎）
猥褻の研究
（「愛のコリーダ」起訴に抗議する会編）
自衛隊　（星野安三郎，林茂夫）
ゲリラ戦争　（ゲ　バ　ラ）
日本の防衛産業　（赤城　正一）
政府・自民党・財界　（宮城　正行）
自衛隊　この戦力　（藤井　治夫）
自衛隊の作戦計画　（　〃　）
国家の秘密とは何か　（高田茂登男）
刑法改正をどう考えるか　（刑法改正，
保安処分に反対する百人委員会）
権力と闘うための法律知識
（反弾圧，反権力連絡会議編）
脱税　（倉石　弘之）
松下幸之助を怒らせる本　（平沢　正夫）
医者の告白　（ウェレサーエフ）
労働組合とはなにか　（大森　誠人）
病気と人間
（楡林達夫，小山仁示，金谷嘉郎）

増補　危険な食品　（郡司　篤孝）
恐怖の食物　（　〃　）
なにを食べたらいいか〜Ⅰ主食・副食編
（　〃　）
なにを食べたらいいか〜Ⅱ調味料・飲料編
（　〃　）
新版　差別　（東上　高志）
地獄のゴングが鳴った　（高杉　晋吾）
原価の秘密　（大門　一樹）
続・原価の秘密　（　〃　）
化粧品の秘密　（大門一樹，平沢正夫）
間違いだらけのウイスキー選び
（平沢　正夫）
情報化社会とはなにか　（河村昭治郎）
三里塚　（朝日ジャーナル編集部）
日本の医療は狂っている　（水野　肇）
不良商品一覧表　（日本消費者連盟）
あぶない化粧品　（　〃　）
ほんものの酒を！　（　〃　）
どの歯医者がいいか？　（　〃　）
都市は崩壊する　（斎藤　栄）
危険な都市　（本間　義人）
公害発生源労働者の告発
（横山好夫，小野木祥之）
頭脳支配　（高杉　晋吾）
部落差別と冤罪　（　〃　）
闇の帝王，池田大作をあばく
（山崎　正友）
ジャーナリスト　（鈴木　均）
欠陥車と企業犯罪　（伊藤　正孝）
過激派壊滅作戦　（滝川　洋）
雑学としてのアメリカ　（皆河　宗一）
トルコ生態学　（久家　巧）
光化学スモッグ
（高橋 光正，金戸真二，花村君枝）
フッ素とむし歯　（高橋　晄正）
国民総背番号体制（高見圭司，玉川洋次）
安楽死のすすめ　（太田　典礼）
国土総合開発の経済学　（飯田清悦郎）
野に起つ　（戸村　一作）
部落は闘っている　（上田　卓三）
現代医療の問題点　（谷　みゆき）

腹腹時計と〈狼〉（鈴木　邦男）
新聞の“誤報”と読者（神楽　子治）
ほんものの日本酒選び（稲垣　眞美）
裁判官の内幕（松永　憲生）
わが闘争・猥褻罪（大坪　利夫）
「ワイセツ」考（山田　宗睦）
猥褻出版の歴史（長谷川卓也）
狭山差別裁判（野間　宏）
虐殺される動物たち（藤原　英司）
従軍慰安婦（正・読）（千田　夏光）
読書戦争（紀田順一郎）
警察の人権侵害（千代丸健二）
車原病（小林直司，渡辺勲蔵）
文明は死の行進をはじめた（北沢　方邦）
欠陥商品（巻　正平）
覚せい剤（室生　忠）
憲法違反の税は払えません
（良心的軍事費拒否の会編）
私の熟年生活（セカンドライフの会編）
不可触民の道（山際　素男）
弁護士という職業（河合　弘之）
新宿物語（伊東　聖子）
ＮＨＫはもういらない！（行宗　蒼一）
弁護士の内幕（佐藤　友之）
食べすぎる日本人（安達　巌）
勉強に強くなる本（小林　良彰）
教師という職業（望月宗明，矢倉久泰）
実践的性教育（武川　竹男）
教科書戦争（毎日新聞社教育取材班）
増補　生体実験（清水　昭美）
心と“やまい”～性格と心と身体～
（森山　公夫）
テレビ！テレビ!!テレビ!!!（遠藤　淳）
西部劇（増淵　健）
武道の理論（南郷　継正）
武道の復権（　〃　）
武道への道（　〃　）
古典落語大系
（江國滋，大西信行，永井啓夫）
実戦話術～口べたよ，さようなら
（馬場　雅夫）
詩入門（秋山　清）
歴史の実験（五味川純平）
人間の条件(1)～(6)（　〃　）
戦争と人間(1)～(18)（　〃　）
ＳＦハイライト（福島　正実）
旅の思想（山崎　昌夫）
第三の性（森崎　和江）
新版　未完の旅路(1)～(6)（大塚　有章）
二等兵シュベイク（ハーシェク）

理科年表　昭和59年版　丸善
現代用語の基礎知識　1984　自由国民社
消防白書　昭和58年版　大蔵省
小六法全書　昭和59年版　有斐閣

寄贈図書

寄贈者	書名
ＰＨＰ研究所	坪内寿夫経営語録 成功への意識革命
日産自動車㈱	21世紀への道～日産自動車50年史
建設省土木研究所	天然資源の開発利用に関する日米会議，耐風，耐震構造専門部会第15回合同部会会議録
広島県企画振興部情報統計課	昭和57年広島県の工業
日本光学	貿易之日本　別冊　世界のニコンが築く先端技術の全貌
INTERNATIONAL ROAD FEDERATION	WORLD SURVEY OF CURRENT RESEARCH AND DEVELOPMENT ON ROADS AND ROAD TRANSPORT 1983年版
株式会社アマダ	アマダ最新機電用語事典
日本電子計算機㈱	JECCコンピューター・ノート 1983 年版
ＫＤＤエンジニアリング・アンド・コンサルティング	国際交通技術
さんちょう株式会社	電気通信年鑑 1983
三次工事事務所	三十年史
内閣総理大臣官房広報室	日本の白書　昭和59年
(財)新住宅普及会	住宅建築研究所報№10　1983
清水建設株式会社	清水建設百八十年
広島女子大学	こんにゃくの科学
日本鉄道建設公団	上越新幹線工事誌(大宮・新潟間)
大同生命保険相互会社	大同生命福岡支社旧社屋　移築保存調査報告書